

南英謙宗撰『伝法偈下語』の意義

——如浄・道元に関する説示を中心として——

龍 谷 孝 道

はじめに

室町期に活躍した南英謙宗（一三八七～一四六〇、以下謙宗）は五位思想の碩学として知られ、多くの著作を残している。

『伝法偈下語』（駒澤大学図書館所蔵、以下『下語』）は、過去七仏より謙宗の本師である耕雲寺開山傑堂能勝（一三五五～一四二七、以下能勝）に至るまでの諸仏諸祖に関する、伝法偈や開悟の機縁に対する講義録である。本書には謙宗以前の曹洞宗の祖師に関する貴重な言句が含まれており、謙宗自身の思想に加え、南北朝・室町期の曹洞禅僧の思想を考察する上でも重要となる。

椎名宏雄氏は『下語』の書誌を検討し、さらに本書が謙宗の親撰であることを明確に示している⁽¹⁾。椎名氏は、本文中に謙宗の撰述書類に特有の文体が見えることや、謙宗が師の能勝から『伝心法要』の要句を直に聴聞したことを記す文言が存在することから、本書が謙宗の親撰であると断定している。

さらに謙宗が伝法偈の講述を行ったのは、瑩山紹瑾（一二六四～一三二五、以下紹瑾）の『伝光録』を範としながら新たに伝法偈を素材とし、自己の洞上における立場を明確にしようとしたからであるとの推察を加えている。

ただし、椎名氏による『下語』の検討は、紹瑾の撰述とされる『秘密正法眼蔵』を主題とする研究の中で行われたものであるため、中世曹洞宗の思想を探ることができる貴重な文献であることが指摘されながらも、具体的な内容にまでは言及されていない。また、その他の『下語』に關説する論考も、この『秘密正法眼蔵』の書誌的考察にちなむものが多い⁽²⁾。

よって本論では、『下語』に記される如浄（一二六二～一二二七）と道元（一二〇〇～一二五三）に関する説示を中心に考察を加え、本書の中世曹洞宗史上における意義を明らかにしたい。

『伝法偈下語』の講述形態と出典傾向

まずは『下語』における謙宗の講述形態を、過去七仏の迦

葉仏章を例として確認したい。

迦葉仏偈曰、一切衆生性清淨、從本無生無可滅、即此身心是幻生、幻化之中無^二罪福^一、

月云、一切衆生性清淨、一身清淨故^①多有清淨^{ナリ}、乃至十方衆生円覺清淨、從本無生無可滅、氷壺無^二影像^一、猿猴探^二水月^一、即此身心是幻生、幻化之中無罪福、瞥然^③飛過^{トシテ}誰家^ニ燕^ヲ、驀地吹來^ル何^ノ処^ノ花^ヲ、(『下語』二丁表、読点・傍線筆者、以下同)

まずはじめに本則として迦葉仏の伝法偈が提示され、さらに「月云」として謙宗の講述が続く。伝法偈の第一句に対して『円覺經』の經文(傍線①)が、第二句に対して豊干が寒山に答えた詩偈(傍線②)が引用され、さらに第三・四句に対しては南宋の洪邁(一一二三～一二〇二)の編纂した『夷堅志』「甲志」巻六に収録される陳築の「春晴詩」の一節(傍線③)が引用されている。

ここでの講述はまさしく下語の形態となっているが、章によつては会下の僧との問答を記録したり、あるいは謗語を發して回答を求め、それに対する一転語(代語)を唱えるなど、単なる下語集とは言えない形態も有している。

『下語』の出典傾向の特徴としては、この迦葉仏章に端的に見られるように、經典・祖録に限らず、詩文集や外典からの引用も多く含まれることが挙げられ、謙宗の深い教養を読み取ることができる。また、伝法偈の存しない中国曹洞禅僧の機縁については『五家正宗贊』からの引用が多く見られる

点や、五位思想の易学的解釈で重用される『周易』の要語が多く引用される点なども特徴として挙げられる。

謙宗の禅僧としての経歴は五山から始まっており、曹洞宗への転向後も臨済の宗風による影響が少なくなかったことが佐藤英樹氏によつて指摘されている。⁽³⁾ 臨済宗で重用された『五家正宗贊』の引用が多く行われることも、このような影響が考えられるであろう。また佐藤氏は、謙宗の親撰とされる『耕雲種月開基年代並傑堂和尚行状及謙宗年譜私録』(以下『私録』)に含まれる語録の引用典籍として、『周易』『漢書』などの漢籍や、寒山・蘇軾・杜甫・杜牧・葉苔磯などの漢詩を挙げているが、『下語』でもこれと同様の傾向が存する。このような引用傾向の一致は、『下語』が謙宗の親撰であることを肯定する一要素になると考える。

『伝法偈下語』における如浄と道元

中世曹洞宗の祖師が、開祖である道元の思想をどのように捉えていたかを具体的に把握できる典籍は少ない。そのため、『下語』における道元章の説示は、室町期の禅僧が道元の思想をどのように捉えていたかを知る上で重要となる。そこで、本師である如浄章も含めて、道元章がどのように展開されているかを見ていきたい。

天童如浄禅師、上堂拏、世尊云、一人發真帰源、十方虚空悉皆消

殞、乃云、既是世尊所説、未_レ免尽作奇特ノ商量、天童則不_レ然、一人発_レ真帰_レ源、乞兒打_二破飯碗_一、

月云、一人発_レ真帰_レ源、十方虚空悉皆消殞、作麼生会、云、却將_二錦樣鶯花ノ地_一、變作_二元暉水墨ノ図_一、云、如何是水墨ノ図、有僧指_二大極ノ図_一云、看、月云、堪_レ笑翰林陶学士、年々依_レ様書葫蘆、便掀_二却図_一急索云、更道々々、便縮却舌、悚然_{シテ}良久、天童則不_レ然、一人発_レ真帰_レ源、乞兒打破飯碗、便展_レ手云、還我破片来、自代云、何不_レ早道、既抛_二在這ノ_三猛焰裡_一了也、和語剝_二却離卦_一、乃云、蓋先師別有_二密啓_一一着、更請、委悉參徹看、（『下語』二二丁表、二二丁裏、訓点の欠落は原文のままとした、以下同）

如浄章は、『楞嚴經』の一節を拈提した上堂が本則とされている。謙宗はこの上堂を起点に、会下の僧との活発な問答の応酬を展開している。しかもその解釈は、太極図を用いながら、五位の易学的解釈でも重要となる離卦をもって収束させており、謙宗の『重離晝變説』などの著作との関連も窺わせるものでもある。この如浄章で特に注目したいのは、傍線部のように、謙宗の先師である能勝の「密啓一着」が別に存在していることが示されている点である。密啓とは、「秘密のおしえ」というほどの意に解せるが、如浄の上堂に関して、能勝による秘伝的解釈が謙宗に伝承され、参学すべき対象となっていたと考えられる⁽⁴⁾。

如浄章をふまえ、次に道元章を見てみたい。道元章は二段に分かれているが、本論では前段を考察対象とする。

永平道元禪師、挙_二天童浄一人発_レ真帰_レ源乞兒打破飯碗之話_一、乃云、大仏道、一人発_レ真帰_レ源、十方虚空発_レ真帰_レ源、永平旧号大仏寺

月云、一人発_レ真帰_レ源、十方虚空発_レ真帰_レ源、意旨如何、云、馬蹄何処避_レ残紅、乃云、当_レ知虚空在_二汝心内_一、猶如_二点_三片雲大_一清裡、況諸世界在_二虚空邪_一、是亦有_二密啓一件_一、別請商量看、（『下語』二二丁裏、二二丁表）

「大仏道」と始まる道元の説示は、大仏寺時代の寛元二年（一二四四）二月二十七日に示衆された『正法眼蔵』「転法輪」巻からの引用と推察できる。この説示に対して謙宗は、「当知虚空（中略）在虚空邪」という『楞嚴經』の一節（『大正蔵』一九卷一四七頁中）を引用し、さらに如浄章の時と同じく「密啓一件」が有ることを示し、会下の大衆に商量を請うている。本則の選定と「密啓」の存在から、明らかに謙宗は如浄章と道元章を関連付けて講述していると言えよう。

能勝・謙宗と『正法眼蔵』「転法輪」巻

『正法眼蔵』「転法輪」巻は、如浄の『楞嚴經』に基づく上堂を拈提した示衆である。「一人発_レ真帰_レ源」を拈じた如浄に、五祖法演・仏性法泰・圓悟克勤、そして道元自身を加えた五師の語を前提としながら、偽經とされる『楞嚴經』であつても仏祖に転ぜられたものは「仏句祖句」になることを示し、仏祖の転法輪を明かすものである。『下語』の如浄章も、『如浄録』からの引用というよりは、「転法輪」巻をふまえてい

ると見るべきであろう。

如浄章・道元章で示される「密啓」とはおそらく、この「転法輪」巻に関する能勝の秘伝的解釈であったと考える。諸仏諸祖による伝法偈や要訣を講述する『下語』において、曹洞禅僧にとって最も重要となる如浄章・道元章に「転法輪」巻が本則として選択されていることは、謙宗が道元の著述の中でも同巻を重視していたことを示しているよう。これを証するように、『私録』には「転法輪」巻に関する次のような記述が存する。

応永三十一年甲辰、謙宗、法臘二十三、世寿三十八、三月十一日脱参了^ニ於^ニ殿前^一失脚喫顛、忽然^{トシテ}契^レ旨^ニ、四月二十七日、永平寺ノ檀那波多野元尚、以^ニ永平寺開山ノ真筆ノ転法輪書^一贈^ニ与^ニ耕雲先師^一、師即日^ニ与^ニ永平曩祖^一設^レ齋仍為^ニ顯^ニ示^ニ其^ノ語^ヲ遂^ニ秘^レ之^一、翌日^ニ命^ニ謙宗^一寫^{シム}之^ニ二冊、其^ノ一冊ハ先師常自誦持、一冊ハ乃授^ニ与^ニ謙宗^一、殊以^ニ為^ニ印心之証^一、因法輪転法輪之両節密^ニ商量参徹^ニ了^ニ矣^一、(新潟県種月寺所蔵『私録』五丁裏(六丁表))

これによれば、応永三十二年(一四二四)三月一日に契悟した謙宗は、同年四月二八日に波多野元尚より能勝に贈与された道元真筆の「転法輪」巻を二冊書写した。その一冊は能勝が「常自誦持」し、もう一冊は謙宗に授与され、「印心之証」とされたのである。

ここで注目したいのは、傍線部のように、能勝が「転法輪」巻の到来に際してその語を顕示しながらも「遂秘之」し、

南英謙宗撰『伝法偈下語』の意義(龍谷)

さらに能勝と謙宗の間でのみ「転法輪」巻を介して「密商量参徹了」されたことである。この記述は、能勝による「転法輪」巻の商量が、伝法の資である謙宗だけになされ、その教えが秘密的に伝えられたことを示すものと考えられる。これは謙宗が如浄章において述べた「先師別有密啓一着」という言葉を想起させるものである。

謙宗の親撰と考えられる『下語』と『私録』の両典籍に、同じく「転法輪」巻に関する言及が確認できることは、能勝・謙宗が同巻を重視していたことを強く推察させるものであり、またその伝授において密伝的解釈が行われていたことは、室町期の曹洞宗教学を考える上で重要な事実であろう。それは、室町期以降に多く残された門参文献に見られるような密参禅的な要素が、既に能勝・謙宗師資の間に存したことを実際に示すものであるからである。

『報恩録』との関係

ここで、中世曹洞宗の教学を読み取ることができる文献である『報恩録』を参照したい。『報恩録』は、瑩山紹瑾の撰述という識語がありながら、実際には後世の太源宗真(一三七〇寂)門派に属する僧の名前などが散見することから、同派の門流が中心となり、様々な僧達の言説が重層的に組み合わせられて成立した文献であると考えられる。

『報恩録』巻下には「五大老折角」と題された、「転法輪」巻に基づく公案が存する。「五大老」とは、「転法輪」巻で「一人発真帰源、十方虚空悉皆消殞」の句を拈提した五師のことである。『報恩録』において道元の言説が本則となっている例は少ないが、数ある道元の説示から「転法輪」巻が用いられているのは如何なる理由からであろうか。推測が許されるならば、それは先に確認したような、能勝・謙宗師資による「転法輪」巻の重視が背景にあると考える。『報恩録』の諸写本の中でも、特定の禅者の言葉が多く明記されている最福寺所蔵本には、「五大老折角」の注釈として次のような文言が確認できる。

耕雲先曰、一人発真帰源、十方虚空築著碁著、顧視左右曰、鉄団団（併集力）鬱鬱鬱、拶云、畢竟如何、云、一針直下透全身、抄云、畢竟納僧ノ最初当著ヨ、又云、全身放下是全身、頂デモ有レ、タナウラデモ有レ、針ヲシット立ル処デ、全身ニグット透タゾ、（『曹洞宗全書』「宗源下」六一―六二頁）

「耕雲」とは、耕雲寺を開山した能勝のことであり、「十方虚空築著碁著」は、五祖法演の語である。この一段の注釈は、「転法輪」巻の五師のうち、五祖法演の語に対する能勝の講述なのである。これまでの考察をふまえれば、「五大老折角」の注釈に能勝のものとされる講述が含まれることは、単なる偶然の一致と言い切ることもできないであろう。

能勝・謙宗は太源派に属する僧であるが、上述の如く『報恩録』の編纂には同派が深く関わったと考えられる。そうであれば、太源門派内に伝承された能勝・謙宗による「転法輪」巻に関する教説が影響し、『報恩録』という公案拈提集が編纂される過程で、同巻が「五大老折角」として組み込まれていったと推測することも可能であろう。軽々な判断は慎むべきではあるが、この推測が正しければ、『下語』・『私録』より導き出される能勝・謙宗と「転法輪」巻の関係性は、不明確な点が多く残る『報恩録』の編纂過程の一端を具体的にあとづけることができる貴重な事実となると考える。

おわりに

以上、如浄・道元に関する謙宗の説示を中心に、能勝・謙宗師資における「転法輪」巻の重視、そして『報恩録』の成立背景の一端にまで言及してきた。謙宗の契悟に際して「印心之証」とされた「転法輪」巻は、能勝・謙宗にとって、単に道元の説示の一つというのではなく、まさに伝法の証として特別な意味を持つものであった。また「伝法偈」を講述するという営為も、師資間の嗣法・伝法が強く意識されたか

らに相違ない。能勝・謙宗が「転法輪」巻を伝法の証明物として授受するという発想は、室町期から多く作成される門参や切紙の嗣法

時における相伝に通じるものであり、また、「密啓」という密伝・別伝の教えの存在も、夜参などにおける室内商量と関連するものであろう。このように見ると、能勝・謙宗の説示は、その後の曹洞宗教学の主となる公案・密参禅的要素を多分に含んでいるのである。能勝・謙宗の思想については、五位思想をもってその中核とされており、それ自体に誤りはないが、本論で言及したような、室町期以降の曹洞宗教学の特徴を示す別の側面も考えられるべきであらう。

中世曹洞宗の思想・教学を知る上では、従来用いられてきた語録や僧伝史料に加え、新たに発掘されてきた抄物をはじめとする諸文献の活用が不可欠である。しかし、新たな史料にはその真偽をはじめとして未だ多くの問題が残されており、特に断片的に記録される言説を扱う際には注意が必要となる。また、このような史料に対して、その史料自身のみから位置づけを図ることは困難であり、関連する複数の史料を用いて、さらに広い視点から複合的な考察を加える必要が生じるであろう。斯様な状況において、謙宗という一人の人物が著したことがほぼ確実である『下語』のような文献の存在は貴重であり、本論における『報恩録』との関係のように、他の文献に残された記述を考える上での一つの基準点となり得るという意義を内包しているとも考える。

南英謙宗撰『伝法偈下語』の意義（龍谷）

- 1 椎名宏雄「『秘密正法眼蔵』の諸本」（『瑩山禅』一一卷、山喜房仏書林、一九九一年）二三四～二三八頁参照。
- 2 例えば、石川力山「『秘密正法眼蔵』について」（『宗学研究』二〇号、一九七八年三月）など。
- 3 佐藤英樹「南英謙宗とその語録——「南英謙宗語録」を中心として——」（『駒澤大学仏教学部論集』四三号、二〇一二年一〇月）参照。
- 4 松田陽志「南英謙宗の五位説に関する一考察——重離疊変説をめぐる——」（『駒澤大学仏教学部論集』二六号、一九九五年一〇月）では、『重離疊変訣』に示される謙宗の「密伝」とその具体的内容に関する考察がなされており、「密啓」を考える上で大きな示唆を与えてくれる。

〔附記〕本論で用いた『私録』は、種月寺に所蔵される写本の写真データを、佐藤英樹氏より拝見させて頂きました。ここに記して、種月寺御住職寒河江真爾師並びに佐藤英樹氏に厚く御礼申し上げます。

〈キーワード〉 南英謙宗、傑堂能勝、『伝法偈下語』、道元、如浄
（駒沢女子大学非常勤講師）